７月予報（全２０枚）

病防第２０号
令和４年（２０２２年）６月３０日

各関係機関長　様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
令和４年度（２０２２年度）発生予報第４号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和４年度（２０２２年度）病害虫発生予報第４号（７月予報）

Ⅰ　気象予報：令和４年（２０２２年）６月２３日福岡管区気象台発表
◎向こう１ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要　　素	低　い （少ない）	平年並	高　い （多い）
九州北部全域 （含、山口県）	気　　温	１０	２０	**７０**
	降 水 量	**４０**	**４０**	２０
	日照時間	２０	３０	**５０**

Ⅱ　【今後、注意すべき病害虫】
１　発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早期 水稲	穂いもち	多	多	多(＋)	やや多(＋)	気温高(－) 降水並～少 (－)	巡回調査、 防除員報告 (葉いもち)
早植え 水稲	葉いもち	やや多	やや多	多(＋)	やや多～並 (＋)	気温高(－) 降水並～少 (－)	防除員報告 (葉いもち)
	トビイロウンカ	並	並	並(±)	－	気温高(＋) 早い梅雨明 け（－）	予察灯調査 やや多(＋)
普通期 水稲	葉いもち	やや多	やや多	やや多(＋)	やや多～並 (＋)	気温高(－) 降水並～少 (－)	防除員報告 （苗いもち）

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
普通期水稲	トビイロウンカ	並	並	－	－	気温高(＋) 早い梅雨明け（－）	予察灯調査 やや多(＋)
チャ	炭疽病	並	やや多	多(＋)	並（±）	降水並～少(－)	
	カンザワハダニ	並	並	やや少(－)	やや多～並(±)	気温高(＋) 降水並～少(＋)	ほ場調査 御船町 並（±）
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	並（±）	やや多～並(＋)	気温高(＋) 降水並～少(＋)	ほ場調査 御船町 少（－）
	チャノコカクモンハマキ	やや多	やや多	やや多(＋)	やや多～並(±)	気温高(＋) 降水並～少(＋)	ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ調査 御船町やや多（＋） 合志市やや多（＋）
	ツマグロアオカスミカメ	やや多	やや多	やや多(＋)	並（±）	気温高(＋) 降水並～少(＋)	
	クワシロカイガラムシ	やや多	多	多(＋)	やや多～並(±)	気温高(＋) 降水並～少(＋)	
カンキツ	黒点病	並	並	並(±)	並(±)	降水並～少(－)	宇城市 平年比やや少(－)
	かいよう病	並	並	やや多(＋)	並(±)	降水並～少(－)	
	ミカンハダニ	やや多	やや多	並(±)	やや多～並(±)	気温高(＋) 降水並～少(＋)	宇城市 平年並(±)

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	並	並	並(±)	並～やや少(±)	気温高(＋) 降水並～少(＋)	河内定点調査 粘着板 平年並(±)
ナシ	黒星病	並	並	やや少(－)	やや多～やや少(＋)	降水並～少(－)	
果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	多	－	カンキツ やや多～並(±) ナシ 並～やや少(±)	気温高(＋) 降水並～少(＋)	予察灯・ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ調査 合志市 並～やや少 宇城市並～少 天草市並～少(±) 越冬量 多（＋）
夏秋トマト	灰色かび病	やや少	並	並(±)	やや少(－)	降水並～少(±)	
	葉かび病	やや多	並	多(＋)	並(±)	気温高(－) 降水並～少(－)	
	すすかび病	並	並	やや多(＋)	並(±)	気温高(＋) 降水並～少(－)	
	うどんこ病	多	並	多(＋)	やや多～並(＋)	気温高(－) 降水並～少(＋)	
イチゴ育苗ほ	炭疽病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(＋) 降水並～少(±)	
	うどんこ病	並	並	やや少(－)	やや多(＋)	降水並～少(±)	

作物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
イチゴ 育苗ほ	ハダニ類	やや多	多	多(＋)	並(±)	気温高(＋)	
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	並	並	―	並(±)	降水並～少 (±)	
ウリ科 野菜 (平坦地)	退緑黄化病	並	並	冬春キュウリ やや少(－) コナジラミ 少（－）	―	気温高(＋)	
夏秋 果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	並	並	夏秋トマト 並(±)	夏秋トマト やや多～並 (＋) 夏秋キュウリ 並(±)	気温高(＋)	
夏秋 果菜類 (平坦)	コナジラミ類	並	並	冬春キュウリ 少(－)	夏秋ナス 並～やや少 (－)	気温高(＋)	
	アザミウマ類	並	並	冬春キュウリ 少(－)	夏秋ナス やや多～並 (＋)	気温高(＋)	
野菜類 全般	オオタバコガ	多	多	夏秋トマト 並(±)	夏秋トマト 並(±) 夏秋ナス やや多～並 (＋) 露地キク 並(±)	気温高(＋)	フェロモン トラップ調査 合志市　並 八代市　多 阿蘇市　多 山都町　多 (＋)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(＋)は発生を助長する要因、(－)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

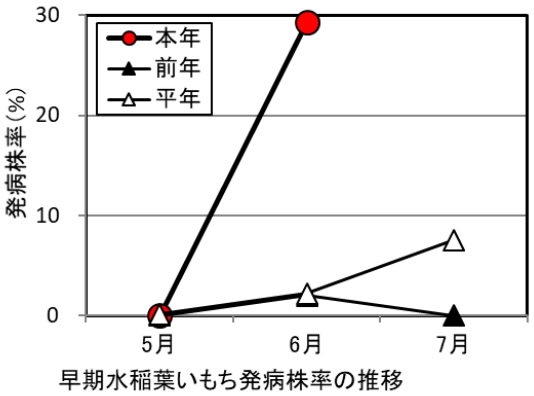
２　予想発生量、根拠、対策等

◎早期水稲

１）穂いもち

（１）発生量：多

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、葉いもちの発病株率は29.3%（平年2.2%）、発病度は9.5（平年0.6）と平年比多の発生であった（＋）。



早期水稲葉いもち発病株率の推移

（３）対策　ア　穂いもちは発生後の防除が困難であるため、出穂前に予防防除を徹底する。

イ　ほ場を観察し、上位３葉に葉いもちの病斑が見られる場合は速やかに防除を行う。

ウ　葉いもちの発生が多い場合は、穂ばらみ後期～穂揃い期に防除を行う。なお、防除後に降雨が続く場合は、穂揃い期の７～10日後に追加防除を行う。

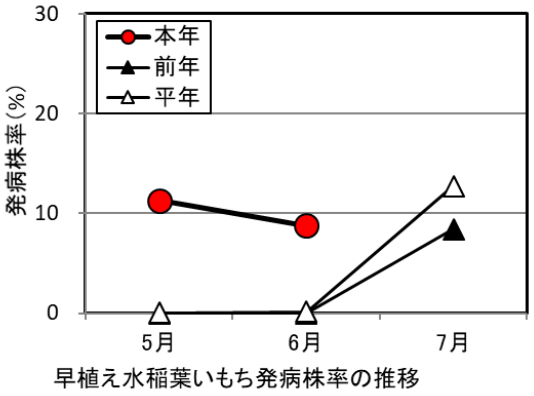
エ　令和４年６月17日付け病害虫発生予察注意報第２号（早期水稲いもち病）を参照する。

◎早植え水稲

１）葉いもち

（１）発生量：やや多

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では発病株率8.8%（平年0.2%）平年比多の発生であった（＋）。



早植え水稲葉いもち発病株率の推移

（３）対策　ア　ほ場を観察し、発生初期に薬剤防除を行う。特に、いもち病に効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、いもち病発生予測システム（BLASTAM）の感染好適日（病害虫防除所のホームページ参照）を参考に、早期発見に努める。

２）トビイロウンカ

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　合志市に設置した予察灯調査で６月26日及び27日にトビイロウンカ７頭を確認し（初誘殺）、平年６月の誘殺数（3.3頭）より多かった（＋）。

イ　梅雨明けが６月28日と平年（７月19日）より早かったことから、今後下層ジェット気流に乗った大陸からの飛来が起こりにくいと思われる（－）。

（３）対策　ア　水田における発生状況を払落し調査などにより確認する。成幼虫数が要防除密度（７月下旬～８月上旬 20頭/100株）を超える場合は防除を行う。

イ　トビイロウンカに効果がある箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。

ウ　水稲の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

◎普通期水稲

1）葉いもち

（1）発生量：やや多

（2）根拠　ア　６月の巡回調査では、発病株率0.5%（平年0.0%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

（3）対策　ア　ほ場を観察し、発生初期に薬剤防除を行う。特に、いもち病に効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、いもち病発生予測システム（BLASTAM）の感染好適日（病害虫防除所のホームページ参照）を参考に、早期発見に努める。

イ　補植用の置き苗は、本田での伝染源となるので、補植が終わったらただちに処分する。

2）トビイロウンカ

（1）発生量：並

（2）根拠　ア　合志市に設置した予察灯調査で６月26日及び27日にトビイロウンカ７頭を確認し（初誘殺）、平年６月の誘殺数（3.3頭）より多かった（＋）。

イ　梅雨明けが６月28日と平年（７月19日）より早かったことから、今後下層ジェット気流に乗った大陸からの飛来が起こりにくいと思われる（－）。

（3）対策　ア　水田における発生状況を払落し調査などにより確認する。成幼虫数が要防除密度（７月下旬～８月上旬 20頭/100株）を超える場合は防除を行う。

イ　トビイロウンカに効果がある箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。

ウ　水稲の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

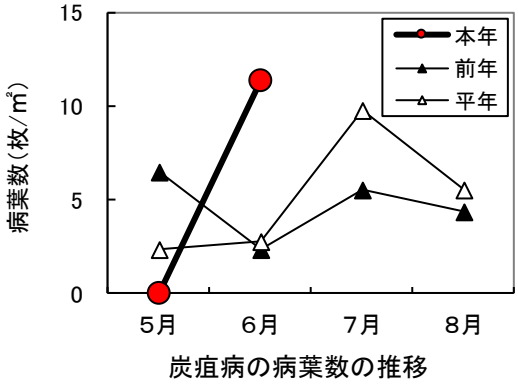
◎チャ

1）炭疽病

（1）発生量：並

（2）根拠　ア　６月の巡回調査では、一部ほ場で多発生が確認され、病葉数11.4枚／㎡（平年2.8 枚／㎡）で平年比多の発生であった（＋）。

イ　防除員報告では、平年並の発生であった（±）。



炭疽病の病葉数の推移

（3）対策　ア　摘採残葉に発病がみられる場合は、三番茶萌芽期から開葉期に防除を行う。

イ　三番茶を収穫しない園では、二番茶摘採後になるべく早く剪整枝し、病葉を取り除いて秋芽への感染を防ぐ。

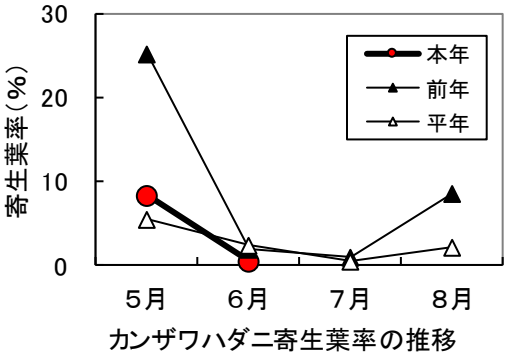
ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2）カンザワハダニ

（1）発生量：並

（2）根拠　ア　6月の巡回調査では、寄生葉率 0.5%（平年 2.4%）と平年比やや少の発生であった（−）。

イ　茶業研究所（御船町）の6月第4半旬の調査では、寄生葉率 3.0%（平年の寄生葉率 2.0%）と平年並の発生であった（±）。



カンザワハダニ寄生葉率の推移

（3）対策　ア　ほ場での発生状況を観察し、発生が多い場合は、収穫使用前日数を考慮のうえ防除を行う。なお、規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

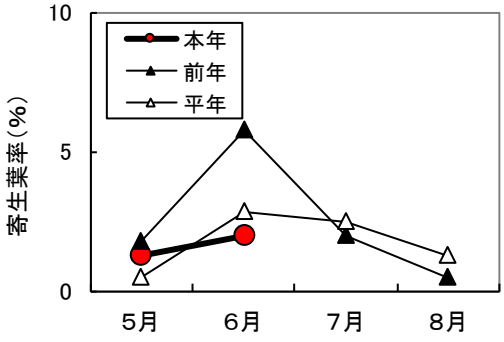
イ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

3）チャノミドリヒメヨコバイ

（1）発生量：並

（2）根拠　ア　6月の巡回調査では、被害芽数は一部ほ場で多く確認され、6.4個／㎡（平年1.4個／㎡）と平年比やや多であったが、寄生葉率は2.0%（平年2.9%）と平年並の発生であった(±)。

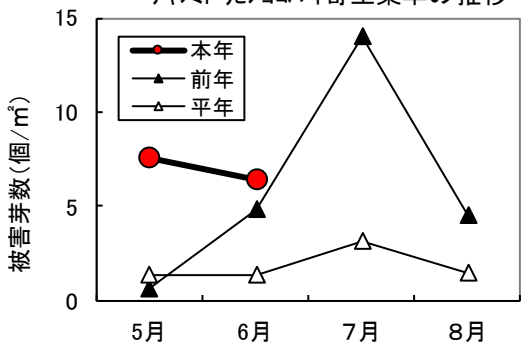
イ　茶業研究所（御船町）の6月第4半旬のたたき落とし調査では、確認されず平年20頭）平年比少の発生であった(−)。



ﾁｬﾉﾐﾄﾞﾘﾋﾒﾖｺﾊﾞｲ寄生葉率の推移

（3）対策　ア　摘採後は摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後に防除を行う。

イ　発生時期が重なるクワシロカイガラムシとの同時防除を行う。



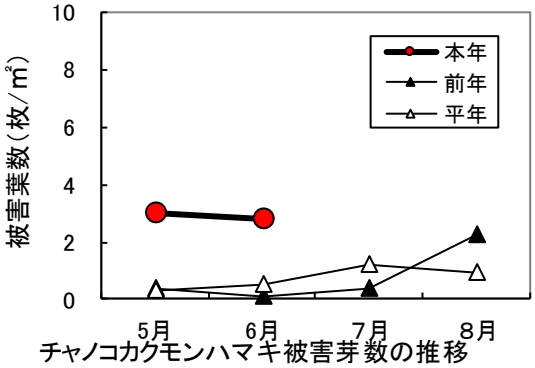
ﾁｬﾉﾐﾄﾞﾘﾋﾒﾖｺﾊﾞｲ被害芽数の推移

4）チャノコカクモンハマキ

（1）発生量：やや多

（2）根拠　ア　6月の巡回調査では、一部のほ場で多く確認され、被害葉数 2.8 枚／㎡（平年 0.5 枚／㎡）と平年比やや多の発生であった（＋）。

イ　茶業研究所（御船町）の6月第4半旬のフェロモントラップ調査では、51 頭（平年 20 頭）と平年比やや多の発生であった（＋）。



チャノコカクモンハマキ被害芽数の推移

（3）対策　ア　各茶期の摘採直後に若齢幼虫をねらい防除を行う。

イ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

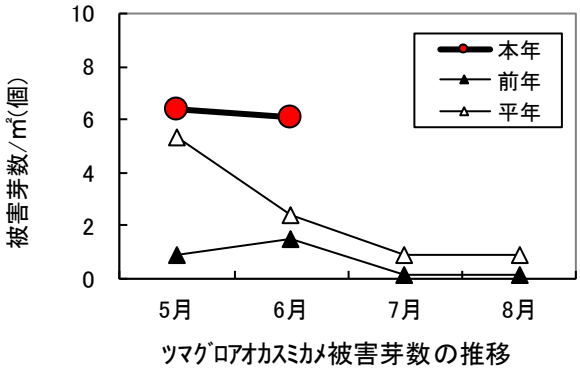
5）ツマグロアオカスミカメ

（1）発生量：やや多

（2）根拠　ア　６月の巡回調査では、一部のほ場で多く確認され、被害葉数 6.1 枚／㎡（平年 2.4 枚／㎡）と平年比やや多の発生であった（＋）。

（3）対策　ア　常多発茶園では、萌芽期を重点に防除する。

イ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ﾂﾏｸﾞﾛｱｵｶｽﾐｶﾒ被害芽数の推移

6）クワシロカイガラムシ

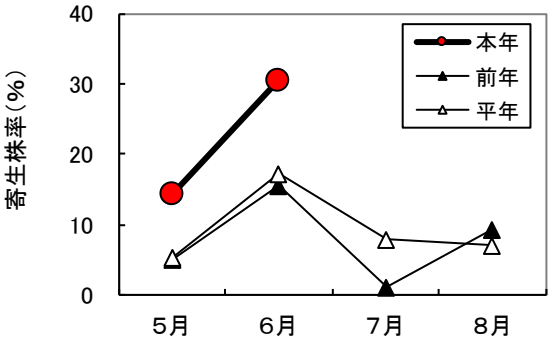
（1）発生量：やや多

（2）根拠　ア　６月の巡回調査では、一部ほ場で多発生が確認され、寄生株率 30.6％（平年 17.2％）と平年比多の発生であった（＋）。

（3）対策　ア　園内の発生状況をよく観察し、ふ化最盛期（卵塊全体の 60～80％になった時期）に防除する。

イ　有効積算温度シミュレーションによる第２世代ふ化最盛日は、平年に比べて５～８日程度早まると予測される。予測を参考に茶園の確認を行って、防除適期を逸しないように注意する。

なお、ふ化最盛日は今後の気温により変動するので、最新の情報を病害虫防除所ホームページで確認する。



ｸﾜｼﾛｶｲｶﾞﾗﾑｼ寄生株率の推移

クワシロカイガラムシのふ化最盛日予測（6 月 21 日現在）

第 2 世代 ふ化最盛日	鹿北	菊池	甲佐	水俣	上
本年 （平年）	7 月 15 日 （7 月 22 日）	7 月 6 日 （7 月 14 日）	7 月 7 日 （7 月 14 日）	7 月 7 日 （7 月 12 日）	7 月 11 日 （7 月 18 日）

※地域によってふ化最盛日はばらつきがあるため、予測を参考にしてほ場をよく観察するとともに発生状況に注意して防除時期を判断する。

ウ　幼虫は、苗木や農機具に付着して分散する場合もあるので、育苗、苗木購入、摘採等管理作業で分散しないように十分注意する。

本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」

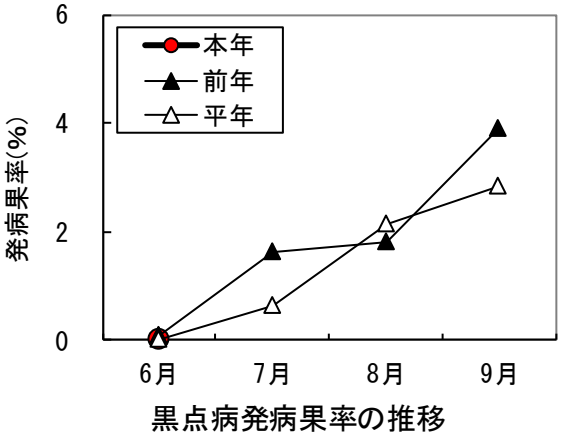
◎カンキツ

1）黒点病

（1）発生量：並

（2）根拠　ア　６月の巡回調査では発病果は認められず（平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

イ　果樹研究所（宇城市）の予察ほ場において、発病果率は６月第４半旬で24.0%（平年38.2%）と平年比やや少の発生であった（−）。



黒点病発病果率の推移

（3）対策　ア　保菌率が高い直径５～10㎜の枯枝は、剪除する。

イ　剪定枝は、伝染源になるので園外に処分する。

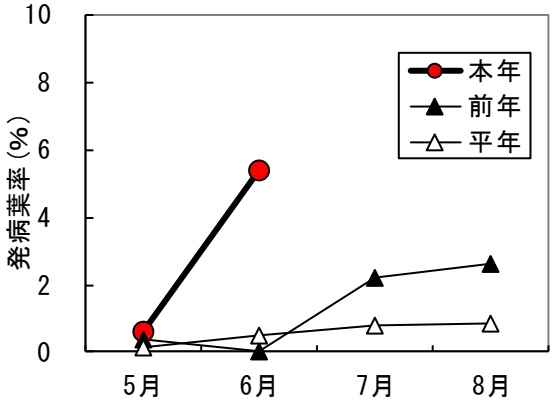
ウ　前回の散布から累積降水量が200㎜～250㎜を越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。

2）かいよう病

（1）発生量：並

（2）根拠　ア　６月の巡回調査では一部ほ場で多発生がみられ、発病葉率5.4%（平年0.5%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

イ　果樹研究所（宇城市）の予察ほ場において、発病葉率は６月第４半旬で7.8%（平年8.3%）と平年並の発生であった（±）。



かいよう病発病葉率の推移

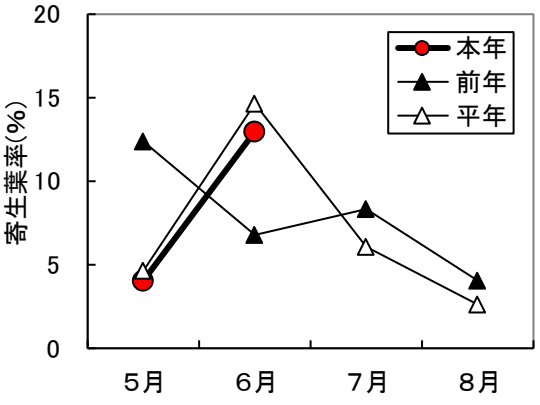
（3）対策　ア　伝染源となる発病葉や枝、果実は除去する。

3）ミカンハダニ

（1）発生量：やや多

（2）根拠　ア　６月の巡回調査では、一部のほ場で多発生がみられ、雌成虫の寄生葉率13.0%（平年14.6%）、寄生頭数5.6頭／10葉（平年7.8頭／10葉）と平年並の発生であった（±）。

イ　果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、６月第４半旬の雌成虫の寄生葉率7.0%（平年11.2%）、寄生頭数0.9頭／10葉（平年1.6頭／10葉）と平年並の発生であった（±）。



ミカンハダニの寄生葉率の推移

（3）対策　ア　定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり５～10頭に達した場合は防除する。

イ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。

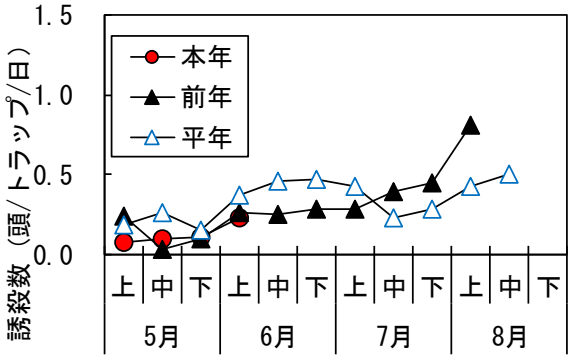
４）チャノキイロアザミウマ

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では被害果は認められず（被害果率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

イ　熊本市河内町の黄色粘着板調査では、６月上旬の誘殺数が0.2頭／日（平年0.4頭／日）と平年並の発生であった（±）。

（３）対策　ア　平年に比べて羽化最盛期が1～5日早い予測となっているため、下表を参考に早めの防除に努める。



黄色粘着板によるチャノキイロアザミウマ誘殺数の推移（熊本市河内町）

イ　発生調査は、果実（100果）を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を越えた場合は防除を行う。

チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果　（6月21日現在）

地点名	本年		平年	
	第４世代	第５世代	第４世代	第５世代
熊本	７月 12 日	７月 29 日	７月 17 日	８月 ２ 日
三角	７月 18 日	８月 ４ 日	７月 20 日	８月 ５ 日
本渡	７月 22 日	８月 ８ 日	７月 23 日	８月 ９ 日
八代	７月 17 日	８月 ２ 日	７月 19 日	８月 ５ 日
水俣	７月 19 日	８月 ５ 日	７月 21 日	８月 ７ 日

※予測された羽化最盛期は今後の気温により変動する。最新の予測結果は、病害虫防除所ホームページを参照する。

◎ナシ

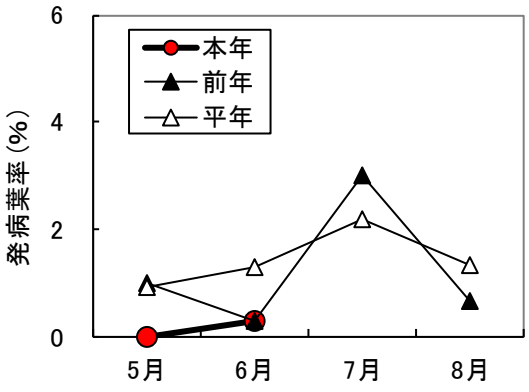
１）黒星病

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では発病葉率0.3%（平年1.3%）と平年並の発生であった（±）。

（３）対策　ア　り病した葉及び果実は周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ　降雨が多いと発生が多くなるため、防除を徹底する。特に「幸水」の果実は、開花60～85日後（６月上旬～７月上旬）に黒星病に対する感受性が高くなるため、発生に注意し、発生初期に防除を行う。



黒星病発病葉率の推移

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。また、ＱｏＩ系、ＤＭＩ系及びＳＤＨＩ系の薬剤は年間使用回数をそれぞれの系統で２回までとする。

◎果樹全般

１）カメムシ類

（１）発生量：やや多

（２）根拠　ア　６月第１半旬～第４半旬のチャバネアオカメムシの予察灯の誘殺数は、合志市及び宇城市は平年並、天草市は平年比少であった。フェロモントラップの誘殺数はすべての地点で平年比少であった（±）。

イ　６月第１半旬～第４半旬のツヤアオカメムシの予察灯の誘殺数は、すべての地点で平年並であった。フェロモントラップの誘殺数は、合志市で平年並、宇城市及び天草市で平年比少であった（±）。

ウ　１月に実施した越冬量調査では、越冬虫数が平年比多、捕獲地点数が平年比やや多であり、７月頃までの発生量は平年より多くなると予想される（＋）。（令和４年２月28日付け病害虫発生予察技術情報第15号参照）

（３）対策　ア　最新のカメムシ類の誘殺状況は、病害虫防除所ホームページに掲載しているので、確認し防除の参考にする。

イ　果樹園への飛来初期は局在し、発見が遅れやすい。園内をよく見回り、早期発見に努め、発生初期の防除に努める。

表　各地域のカメムシ類の誘殺状況（６月第１半旬～６月第４半旬）

地域名	チャバネアオカメムシ						ツヤアオカメムシ					
	予察灯			フェロモントラップ			予察灯			フェロモントラップ		
	本年	平年値	平年比（%）	本年	平年値	平年比（%）	本年	平年値	平年比（%）	本年	平年値	平年比（%）
合志市	52	63	83	61	144	42	71	74	96	1	2	50
宇城市（松橋町）	115	128	90	3	463	1	612	525	117	3	135	2
天草市（本渡町）	178	854	21	136	561	24	595	850	70	4	66	6

単位：頭、　平年比（%）：（本年誘殺数／平年値）×100

◎夏秋トマト

１）灰色かび病

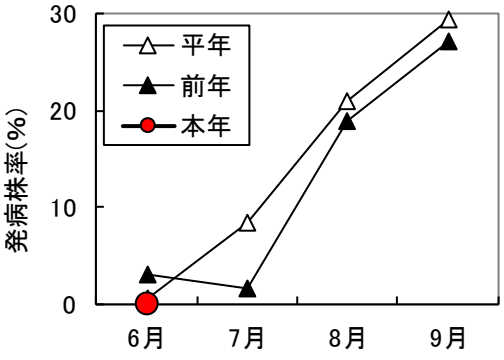
（１）発生量：やや少

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、茎葉も果実も発病株は認められず（発病株率平年茎葉0.7%、果実0.1%）、平年並であった（±）。

（３）対策　ア　摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ　被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率（茎葉）の推移
（夏秋トマト）

本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。
「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」

２）葉かび病

（１）発生量：やや多

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、発病株率8.3%（平年0.3%）で平年比多の発生であった（＋）。

（３）対策　ア　抵抗性品種でも発病に注意する。

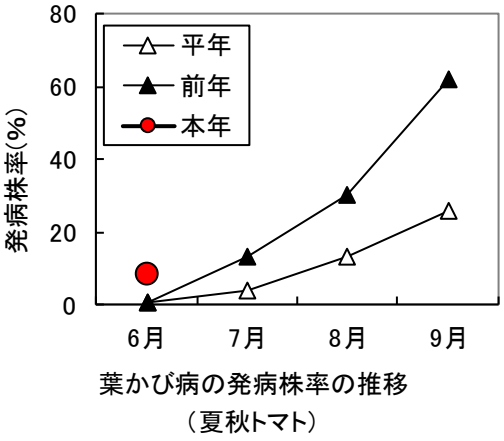
イ　肥料切れで多発するので、適正な肥培管理に努める。

ウ　摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

エ　気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

オ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

カ　被害葉や老化葉は早めに除去する。



葉かび病の発病株率の推移
（夏秋トマト）

３）すすかび病

（１）発生量：並

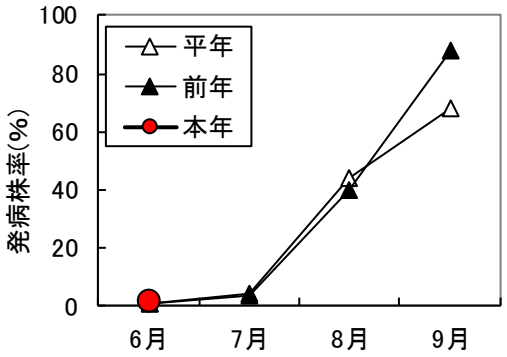
（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、発病株率1.7%（平年0.6%）で平年比やや多の発生であった（＋）。

（３）対策　ア　摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ　気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ　被害葉や老化葉は早めに除去する。



すすかび病の発病株率の推移
（夏秋トマト）

４）うどんこ病

（１）発生量：多

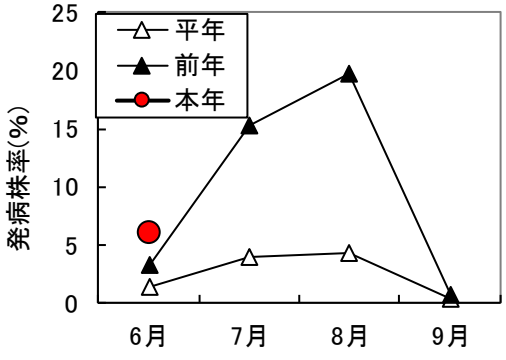
（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、発病株率6.0%（平年1.4%）で平年比多の発生であった（＋）。

（３）対策　ア　乾燥条件でもよく発生するので、ハウス内をあまり乾燥させないよう管理する。

イ　発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ　多発すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病の発病株率の推移
（夏秋トマト）

本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」

◎イチゴ育苗ほ

１）炭疽病

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、親株において発病株は認められず（発病株率平年0.0% ※子株調査）、平年並であった（±）。

（３）対策　ア　親株床、育苗床はビニールで雨よけをする（３　防除のポイント等の「**イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう**」を参照）。

イ　頭上かん水を避け、株元に手かん水する。

ウ　育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ　発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

オ　発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。

２）うどんこ病

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、親株において発病株は確認されず（発病株率平年1.9% ※子株調査）平年比やや少の発生であった（－）。

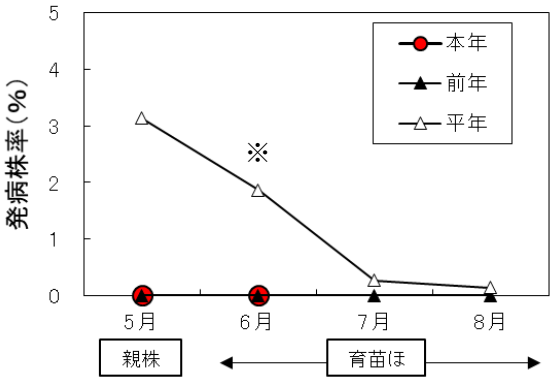
イ　６月の防除員報告では、平年比やや多～並の発生であった（－）。

（３）対策　ア　盛夏期には潜在感染して菌そうが見えなくなる。発生していないほ場でも定期的に防除を行い、発生前から予防防除を徹底する（３　防除のポイント等の「**イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう**」を参照）。

イ　発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ　葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病（葉）の発病株率の推移（イチゴ）

※６月の調査値について、本年は親株調査、前年以前は子株調査の値

本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」

３）ハダニ類

（１）発生量：やや多

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、親株において寄生葉率31.7％（平年8.5％　※子株調査）で、平年比多の発生であった（＋）。

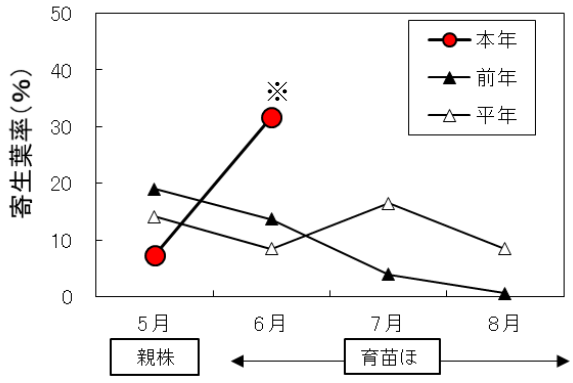
（３）対策　ア　本ぽに持ち込まないよう育苗期の防除を徹底する（３　防除のポイント等の「**イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう**」を参照）。

イ　寄生葉は早めに取り除き、ほ場外に処分する。

ウ　寄生密度が高くなると防除が困難になるため、発生初期から防除を徹底する。

エ　葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏にも十分かかるように散布する。

オ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ぽでの栽培期間を通した防除計画を立て、育苗期は気門封鎖剤を主体とした防除を行う。



ハダニ類の寄生葉率の推移（イチゴ）

※６月の調査値について、本年は親株調査、前年以前は子株調査の値

◎夏秋キュウリ（高冷地）

１）べと病

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　６月の防除員報告では、平年並の発生であった（±）。

（３）対策　ア　湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、適正な肥培管理と排水に努め、過湿を避ける。

イ　多発生後は防除が困難なので予防防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎ウリ科野菜（平坦地）

１）退緑黄化病

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、冬春キュウリで発病株率15.0％（平年21.9％）で、平年比やや少の発生であった（±）。

イ　６月の巡回調査では、冬春キュウリのコナジラミ類の発生は見られず（寄生葉率平年8.4％）平年比少であった（－）

（３）対策　ア　病原ウイルスを媒介するタバココナジラミの発生に注意し、媒介虫の防除対策を徹底する。

イ　施設内の発病株や周辺の野良生えは、重要な伝染源となるので除去する。

ウ　栽培終了後はハウスの密閉処理を行い、ウイルスを保毒したタバココナジラミのまん延を防止する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

◎夏秋果菜類（高冷地）

１）コナジラミ類

（１）発生量：並

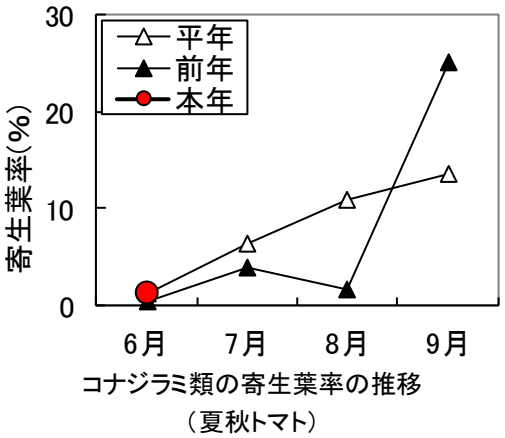
（２）根拠　ア　６月の夏秋トマトの巡回調査では、寄生葉率1.2%（平年1.2%）で平年並の発生であった（±）。

（３）対策　ア　幼虫や成虫などの発育ステージによって有効薬剤が異なる。複数の発育ステージの個体が混在すると防除が困難となるので、初期防除を徹底する。

イ　施設内部の雑草は、主要な増殖源となるので除去する。

ウ　黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



コナジラミ類の寄生葉率の推移
（夏秋トマト）

◎夏秋果菜類（平坦地）

１）コナジラミ類

（１）発生量：並

（２）根拠　ア　６月の巡回調査では､冬春キュウリで発生は見られず（寄生葉率平年8.4%）平年比少の発生であった（－）。

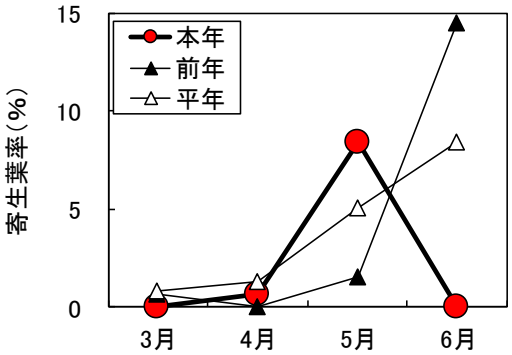
イ　６月の防除員報告では、夏秋ナスで平年比並～やや少の発生であった（－）。

（３）対策　ア　キュウリ退緑黄化病、メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では防除対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ　施設内部の雑草は、生息場所となるので除去する。

ウ　密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。現在発生しているほ場では､早急に防除する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤ローテーション使用を行う。



コナジラミ類の寄生葉率の推移
（冬春キュウリ）

２）アザミウマ類
（１）発生量：並
（２）根拠　ア　６月の巡回調査では、冬春キュウリで発生はみられず（寄生葉率平年2.2%）、平年比少の発生であった（－）。
イ　６月の防除員報告では、夏秋ナスで平年比やや多～並の発生であった（＋）。
（３）対策　ア　粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。
イ　ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では防除対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。
ウ　施設内の雑草は、主要な増殖源となるので除去する。
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎野菜類全般
１）オオタバコガ
（１）発生量：多
（２）根拠　ア　フェロモントラップによる６月第１～４半旬の誘殺数は、八代市及び阿蘇市、山都町で平年比多、合志市で平年並であった（＋）。
（３）対策　ア　施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。
イ　１卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。
ウ　老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。最新の情報は病害虫防除所のホームページを参照して防除時期を判断する。
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

3　防除のポイント等

トビイロウンカの適期防除に努めましょう

「坪枯れ」等の被害を引き起こすトビイロウンカは毎年主に梅雨時期に海外から飛来します。また、梅雨明け後に高温で推移する年は増殖が速くなるため、水田における発生状況を定期的に把握し、適期防除を行うようにしましょう。

（1）若齢幼虫期が防除の適期となる。
（2）水田における発生状況を定期的に把握する。
（3）病害虫防除所が発表する飛来情報や防除適期情報を参考に、適期防除に努める。

イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう

1　ハダニ類

育苗ほをよく観察するとともに、以下の防除対策を徹底することで育苗ほでの発生を防止しましょう。

＜防除対策＞

（1）ほ場周辺およびほ場内の雑草は定期的に除草する。
（2）除去した下葉は、ほ場周辺に放置せず適切に処分する。
（3）育苗ほでハダニ類の発生が認められた場合は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。ただし、気門封鎖剤は、卵に効果が低く、残効も短いので、約７日間隔で複数回散布する。

2　炭疽病

保菌親株から苗への炭疽病菌の伝染および苗での炭疽病菌のまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

＜防除対策＞

（1）親株ほ、育苗ほは必ず雨よけを行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
（2）親株ほ、育苗ほにはこれまで本病が発生していないほ場を選び、冠水しないように排水対策を講じる。
（3）頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
（4）ランナー発生前から予防的に薬剤防除を行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
（5）発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

3　うどんこ病

本ぽ定植後の発生を抑制するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

＜防除対策＞

（1）発病葉および不要な下葉は早めに取り除き処分する。
（2）早期発見のため、発生しやすい葉裏まで丁寧に観察する。
（3）薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
（4）薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
（5）気温が高い夏期は病勢進展が抑制されるが、定期的に予防防除を行い、新葉への感染を防ぐ。

野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

そこで、ウイルスを保毒した微小害虫のまん延を防止するため、栽培終了後に密閉処理を行い、まずは植物体を完全に枯らしましょう。さらに、地域で取り決めた期間にわたり処理を継続することで、確実に微小害虫を施設内で死滅させましょう。

１　密閉処理による微小害虫防除のポイント

（１）微小害虫（成虫）は、絶食状態では１日以内に死亡する。そこで、施設内の微小害虫を死滅させるため、施設内の雑草を除去し、作物を枯死させることで、植物を摂食できない状況を作る。

（２）施設内の微小害虫が施設外へ飛び出さないよう、施設は被覆ビニール等でしっかりと密閉する。

（３）密閉する日数は、害虫の習性や寄生部位等を考慮して決める。

・コナジラミ類の終齢幼虫は、株が完全に枯死しないと生存、羽化する場合がある。

・ミナミキイロアザミウマの蛹は、土の中にいて植物を摂食しないため、株の枯死と関係なく生存する。蛹期間が、20℃で約７日であるため、密閉処理は、植物体が完全に枯れてから10日以上続ける必要がある。

（４）悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には古株枯死に使用できる薬剤[注1]の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。

（５）密閉処理の途中で施設を開放すると、微小害虫が野外へ逃げ出すため、施設内の片付けは、密閉処理期間を過ぎた後に行う。

注１）令和４年６月３０日現在において使用可能な薬剤は以下のとおり

・カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）

・クロルピクリンくん蒸剤（商品名：クロピクフロー）

※クロルピクリンくん蒸剤のうち使用できるのはクロピクフローのみ

２　野良生えトマトの除去を徹底しましょう

密閉処理を行っても、ハウス周辺に野良生えトマトがあると保毒虫が残る可能性がある。そのため、ハウス周辺の廃棄トマトは早めに土中に埋めるなど適切に処分する。

Ⅲ　【その他の病害虫】

作　物	病 害 虫 名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
早植え・ 普通期 水稲	ツマグロヨコバイ	並	巡回調査は、平年並(±)。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる６月１半旬～６月５半旬までの誘殺数は、平年並(±)。
	ヒメトビウンカ	並	巡回調査は、平年並(±)。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる６月１半旬～６月５半旬までの誘殺数は、平年並(±)。
	セジロウンカ	並	巡回調査は、平年並(±)。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる６月１半旬～６月５半旬までの誘殺数は、平年比やや少（－)。
	コブノメイガ	並	巡回調査は、平年並(±)。 合志市に設置したフェロモントラップによる６月１半旬～６月５半旬までの誘殺は確認されず、平年比やや少(－)。 コブノメイガに効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、発生に注意する。
早期・ 早植え 水稲	紋枯病	並	巡回調査は、平年並(±)。 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤防除を行う。 （要防除水準：穂ばらみ期の発病株率20%）
水稲 全般	縞葉枯病	並	巡回調査は、早期・早植え及び普通期とも平年並（±）。
チャ	チャノホソガ	並	巡回調査は、平年並（±）。 ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ調査　合志市：並（±）、御船町：多（＋） 防除員報告では、平年並（±） 防除効果が高い幼芽期（新芽が５㎜以内）に防除を行う。
	チャノキイロアザミウマ	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 粘着トラップ調査　合志市：少（－） たたき落とし　御船町：少（－） 新芽を加害するため、萌芽～１葉期に防除する。
カンキツ	そうか病	並	巡回調査では平年並（±）。 防除員報告では平年並～やや少（±）。 り病葉はできるだけ剪除する。園内の通風・採光を良くし、雨や露などが早く乾くようにする。
カキ	炭疽病	並	防除員報告は平年並(±)。 降水量は平年並～少(－)。 雨媒伝染性で降雨が多いと蔓延しやすいため、予防防除に努める。
ブドウ	べと病	やや少	防除員報告では平年比やや少(－)。 降水量は平年並～少(－)。 園内の通風採光を図る。昨年発生が多かった園では保護殺菌剤を定期的に散布し、初期感染を防ぐ。

作　物	病 害 虫 名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
夏秋 トマト	ハモグリバエ類	並	巡回調査では平年並(±)。 食害痕が小さいうちに薬剤散布を行う。
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	防除員報告では平年並～やや少(±)。 葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。
夏秋 キュウリ (高冷地)	うどんこ病	並	防除員報告では、平年並(±)。 発生を認めたら直ちに薬剤散布を行う。
夏秋 キャベツ	細菌性病害 (黒腐病、黒斑細菌病、軟腐病)	並	防除員報告では平年並(±)。 ほ場の排水を良くし、風水害の対策を講じる。 また、激しい風雨が予想される場合には事前に薬剤散布を行うとともに、降雨後も薬剤散布を行う。
	コナガ	並	防除員報告は平年比並(±)。 フェロモントラップの６月第１～４半旬の誘殺数は、阿蘇市で平年比やや多（＋）、山都町で平年比少（－)。 ジアミド系殺虫剤を使用したほ場で発生が認められた場合は、他系統の薬剤で防除する。
野菜類 全般	ハスモン ヨトウ	やや少	フェロモントラップの６月第１～４半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮で平年並、合志市及び八代市、山都町、阿蘇市波野で平年比少(－)。 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では、防虫ネットで侵入を防ぐ。
【野菜病害虫の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			

Ⅳ　その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎　詳しい内容等については　病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。
※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」上に掲載しています。